

トピックス ～令和3年度～

1 コロナに負けるな！地産地消応援消費

本県では、新型コロナウイルス感染症の再拡大に伴い、訪日外国人旅行者や外食需要が減少し、県産農畜水産物の消費・流通に深刻な影響が生じました。水産物では、特に養殖業において、出荷量の減少に伴う養殖魚の長期滞留で、収益の減少や維持費の増加が深刻化しており、一刻も早く消費の回帰を促さなければ、生産基盤の衰退までもが危惧される状況です。

また、新型コロナウイルス感染症は児童にも大きな影響を与えています。県内小中学校が臨時休校を余儀なくされ、児童が登校できない・友達と会えない辛い日々を過ごすことになりました。感染状況が改善し登校できるようになっても、感染防止の観点から給食中は「黙食」が推奨されるため、子供たちが給食を満足に楽しめない状況です。

このようなことから、生産者の生産・供給体制の維持はもとより、児童に地元の食の魅力に触れてもらおうと、県産の養殖マダイやカンパチ、ウナギなどを学校給食に提供する取組を行いました。

実際に県産水産物を味わった児童からは、「魚が苦手だったけど、これなら食べられる！」、「魚を育てるって大変なんだ！」など、美味しい給食を食べられた喜び、生産現場のたゆまない努力を知った感動の声が多く寄せられました。

今後も、県産水産物の消費拡大を目指し魚食普及PRに取り組んでいきます。



給食風景

○実際に提供のあった水産物メニューの例



マダイの唐揚げ



きざみ鰻の蒲焼き

2 アマダイ類の種苗生産と放流技術開発

本県で漁獲されるアマダイ類には、アカアマダイ、シロアマダイ、キアマダイの3種があります。最も多いのがアカアマダイで年間15トン程度がはえ縄漁業等で漁獲されています。水揚げ時のアマダイ類の平均単価は、1,800円/kg程度と、他の魚よりも高値で安定しており、本県の沿岸漁業にとって重要な魚です。過去には200トン以上漁獲されたこともありましたが、平成元年をピークに減少し始め、平成23年にはわずか8トンの漁獲という危機的な状況になっていました。

そこで、県では、アマダイ類資源の積極的な回復を図るため、平成28年度から「宮崎海域アマダイ類の資源回復計画」に基づき、漁業者をはじめ、関係者一体となって獲り過ぎないようにする資源管理や、資源をより早く回復させるための種苗放流に取り組んでいます。その結果、資源量、漁獲量ともに増加傾向にあります。

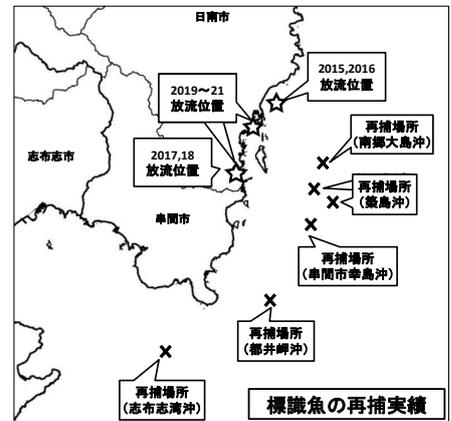
アマダイ類の種苗生産技術の開発は、平成26年度から、親魚の確保などの面で漁業者の協力を得ながら、水産試験場、(一財)宮崎県水産振興協会が連携して取り組んでいます。

年によって生産尾数にばらつきがあるものの、毎年一定数の種苗を生産、放流しており、令和3年度には、これまでで最多となる合計52.7千尾のアカアマダイを県内各地に放流することができました。これらの放流魚の一部は、腹鰭を切除標識することで放流した魚であることが分かるようにしてあります。平成29年以降、合計で17尾の標識魚が漁獲され、放流した魚が、着実に日向灘に根付き、順調に成長していることを確認しています。さらに、令和3年度には全国でも3例目となるシロアマダイの種苗生産にも成功し、油津港において県内で初めて約1.5千尾の種苗を放流しました。シロアマダイは、流通量がアカアマダイに比べて少なく、「幻の高級魚」と呼ばれる魚で、全国各地で種苗生産技術開発に取り組まれています。

今後も、より早期のアマダイ類資源回復を果たすため、関係者との協力、連携の下、着実な資源の管理と増殖に取り組んでいく予定です。

| | 放流尾数 (千尾) | 備考 |
|-----------|--------------|--------|
| H26 ('14) | 8.2 | アカアマダイ |
| H27 ('15) | 21.0 | アカアマダイ |
| H28 ('16) | 22.0 | アカアマダイ |
| H29 ('17) | 5.6 | アカアマダイ |
| H30 ('18) | 6.2 | アカアマダイ |
| R元 ('19) | 18.0 | アカアマダイ |
| R2 ('20) | 7.2 | アカアマダイ |
| R3 ('21) | 52.7 | アカアマダイ |
| | 1.5 | シロアマダイ |

アマダイ類の放流実績



※アマダイ類を放流する際には、海鳥からの食害を防止するために、水産試験場が考案した囲い網を使用しています。

3 これまでのみやざき丸について

水産試験場の漁業調査取締船であるみやざき丸は、平成15年に5代目のみやざき丸として竣工以来、かつお・まぐろ漁業調査や海洋観測等を実施し、本県水産業の振興に寄与してきました。しかし、竣工以来19年が経過し、船体や設備の老朽化が進んでいることから、令和3年度から代船を建造しているところです。そこで、これまでのみやざき丸について振り返ってみます。

初代みやざき丸は、戦後、まぐろはえ縄漁業の近代化が停滞傾向にあったことから、まぐろはえ縄漁業の試験操業でマグロの漁場開発及び資源調査と指導を行い、遠洋まぐろはえ縄漁業への進出を促進するために、昭和26年2月に竣工しました。72.84トンの木製で速力は8.25ノットでした。当時、南那珂郡油津町にあった遠洋漁業指導所に所属し、マグロ資源調査、地元乗組員の養成、合成繊維による漁具実用化試験等を実施していました。



初代みやざき丸



5代目みやざき丸

昭和20～30年代には、本県のかつお一本釣漁船が周年操業化し、規模を拡大し大型化しましたが、漁獲量に変動があり経済的にも不安定であったことから、カツオ・ビンナガ漁場調査・資源調査でその動向を把握し、漁海況情報により業界船の漁獲を向上させることが急務でありました。そこで、2代目みやざき丸はかつお一本釣船型となり、219.65トンと大型化し、鋼船となりました（昭和34年5月竣工）。

以降、3代目（294.78トン）が昭和48年3月に、4代目（169トン）が昭和62年3月に竣工しています。

5代目となる現在のみやざき丸は長崎造船(株)で建造され、平成15年5月に竣工しました。全長43.9m、総トン数199トンの鋼製です。かつお・まぐろ漁業の漁期開始時や漁場転換期の漁場形成の解明のために最新機器を搭載し、資源の把握、予測精度の向上を図りました。また、新たな海洋秩序時代を迎え、資源管理の重要性がますます大きくなったことから、沖合漁場調査や研修等も実施する多機能型船となりました。

長年、かつお・まぐろ漁業調査や海洋観測等で活躍してきましたが、竣工以来19年が経過し、船体や搭載機器の老朽化により、6代目みやざき丸が竣工予定の令和4年11月をもってその役目を終えることになっています。